第1課　宇宙規模の争い

【暗唱聖句】

「竜は女に対して激しく怒り、その子孫の残りの者たち、すなわち、神の掟を守り、イエスの証しを守りとおしている者たちと戦おうとして出て行った」黙示録12:17

【今週のテーマ】

聖書の世界観は善と悪との大争闘という宇宙規模の争いを背景としています。それにより罪や苦しみ、終末の諸事件が展開していきます。わたしたちの人生も、この宇宙規模のドラマの一部なのです。

【日曜日・完全な存在の堕落】

宇宙規模の争いは、どのように始まったのか。愛の神が支配されているこの世界で、なぜ悪が生まれたのか。私たちには多くの疑問があります。しかしそれでもなお、争いは存在し、現実的にわたしたちはそれに巻き込まれています。サタンについて聖書は以下のように記しています。

「お前は神の園であるエデンにいた。あらゆる宝石がお前を包んでいた。ルビー、黄玉、紫水晶、かんらん石、縞めのう、碧玉、サファイア、ざくろ石、エメラルド。それらは金で作られた留め金でお前に着けられていた。それらはお前が創造された日に整えられた。わたしはお前を翼を広げて覆うケルブとして造った。お前は神の聖なる山にいて火の石の間を歩いていた。お前が創造された日からお前の歩みは無垢であったが、ついに不正がお前の中に見いだされるようになった。お前の取り引きが盛んになるとお前の中に不法が満ち罪を犯すようになった」エゼキエル28:13～16

もともとサタン（ルシファー）はケルブと呼ばれる天に住む非常に美しい天使でした。人間と同様に神様から創造されたもので、その歩みは無垢なものでした。しかし、ある日不正が見出されるようになっていきました。いったいそれがなぜなのでしょうか。聖書は次のような言葉を記しています。

「お前の心は美しさのゆえに高慢となり、栄華のゆえに知恵を堕落させた」エゼキエル28:17

人間と同様に与えられた自由意志がサタンを堕落させていったわけですが、しかしそれがなぜなのか、なぜ天において罪が生じたのか、これは誰にもわかりません。エレン・G・ホワイトは「罪の存在を理由づけようとして罪の起源を説明することは不可能である」と言っています。

ただ聖書には「美しさのゆえに（サタンは）高慢になり、栄華のゆえに堕落していった」と書かれてあります。美しさや栄華が罪の始まりの一因であり、堕落の原因の一つとなっていったと言われると、なるほどと思います。そして同時に驚かされるのは、多くの人間はサタンが堕落した原因となった美しさや栄華を追い求めていることです。神様は愛する者たちから、そのような心を取り除きたいと思っておられます。人間の老いは、そのためかもしれません。　さて堕落したサタンは天にいることができず、地上に投げ落とされます。

「ああ、お前は天から落ちた。明けの明星、曙の子よ。お前は地に投げ落とされた。もろもろの国を倒した者よ。かつて、お前は心に思った。「わたしは天に上り王座を神の星よりも高く据え神々の集う北の果ての山に座し雲の頂に登っていと高き者のようになろう」と」イザヤ14:12～14

これにより悪の根源は、地上にやってきました。なぜ神様は悪魔を滅ぼさずに地上に投げ落とされたのか、わからないことがここでもう一つ生まれます。しかし、ここではただ悪魔が地上に悪が投げ落とされたのだという事実を受け止めるしかありません。

【月曜日・頭で知るだけでなく】

わたしたちは悪がなぜ生じたのかを説明することはできません。それが天においてサタンの心の中から始まったことは聖書が明らかにしていますが、それでも情報は限られています。しかし、地上において悪がなぜ生じたのかについては詳しく書かれてあります。

蛇の姿をとったサタンがエバを誘惑するシーンは有名です。最初に蛇は「園のどの木からも食べてはいけない、などと神は言われたのか」（創世記3:1）とエバに語り掛けます。この言葉の背後には、なぜ神はそのようないじわるな命令をしたのかという思いをエバに植え付けようとしているのがわかります。エバは「園の中央に生えている木の果実だけは、食べてはいけない、触れてもいけない、死んではいけないから、と神様はおっしゃいました」（創世記3:3）と答えます。エバは「食べてはいけない」ということの他に「触れてもいけない」と言われたと付けくわえています。この言葉の背後には、神様は酷いという思いが込められているのではないでしょうか。すると、蛇はずばっとこう言うのです。「決して死ぬことはない」（創世記3:4）。

サタンは嘘をつきます。神様がはっきり語られていることをごまかし、うすめようとします。聖書を読む上で注意しなければならにことは、勝手に都合よく解釈しないことです。そして、神様が語られていることを知識として知るだけでなく、行動で従うことが大切です。それは一種の降伏となりますが、それが私たちを守り、幸せに導くのです。神様は決して無理難題を押し付けているわけではないのです。そう思わせるのがサタンなのです。宇宙規模の戦いにおいて勝利をおさめていくためには、サタンの誘惑に勝利し、神様に従っていくことが大切ということです。そのための力を神様は求めるものに与えてくださいます。

【火曜日・天と地における争い】

わたしたちは宇宙規模の争いの中に生きています。わたしたちの知らないところで始まった戦いが、地上においても繰り広げられています。それがどのように始まり、どのような過程を通って、最終的に終わりを迎えるのか、聖書は説明しています。

「さて、天で戦いが起こった。ミカエルとその使いたちが、竜に戦いを挑んだのである。竜とその使いたちも応戦したが、勝てなかった。そして、もはや天には彼らの居場所がなくなった。この巨大な竜、年を経た蛇、悪魔とかサタンとか呼ばれるもの、全人類を惑わす者は、投げ落とされた。地上に投げ落とされたのである。その使いたちも、もろともに投げ落とされた」黙示録12:7～9

ここに天において戦いが起こったことが記されています。それはミカエル（イエス）とその使いたちと、竜（サタン）とその使いたちとの闘いでした。その戦いの結果、サタンとその使いは天に居場所を失い、地上に投げ落とされます。

サタンが反逆したのは自分を造られた創造主に対してでした。この天での戦いに敗れたサタンは、人間の姿を取って地上に来られた幼子イエスを狙い、また十字架の死に追いやることで勝利を得ようとしますが、復活によって逆に人間の罪を赦し、永遠の御国への道を開くきっかけを作ってしまう結果となってしまいます。そこで今度は矛先を人間に変えたのです。イエス・キリストが愛する神の子たちを苦しめたり、堕落させたりすることで、間接的にキリストを苦しめようと考えたのでした。この神の民たちに対する戦いは再臨が近づくにつれ激しさを増していきます。

【水曜日：終わりまで、あなたがたと共にいる】

「女は荒れ野へ逃げ込んだ。そこには、この女が千二百六十日の間養われるように、神の用意された場所があった」黙示録12:6

1260日（預言的には1260年）という数字は黙示録の中で頻繁に出てきます。悪魔が猛威を振るい教会が迫害を受ける期間を表していると言われていますが、そのようなときでさえ、女（教会）は神様が用意された場所があり、そこで養われると約束されています。このみ言葉は、迫害の中にある神の民にとってどれほど大きな慰めと励ましいでしょう。イエス・キリストは「わたしは世の終わりまで、いつもあなた方とともにいる」（マタイ28:20）とも言われています。しかしながら、実際には迫害を受け、殉教していった人たちも大勢います。これをどう理解したら良いのでしょうか。そのような場面に遭遇してみないとわからないことですが、迫害から単に守られ迫害が及ばないということだけでなく、迫害の中にあってもなおそこに主がおられる経験をするのではないでしょうか。たとえば、ステパノが石をぶつけられて殉教していったとき、イエス・キリストが父なる神と共におられるのが見えたように、あるいはダニエル書に出てくる3人の若者が火の炉の中に投げ入れられたとき、まさにその火の中に主がおられたように。

【木曜日：律法と福音】

セブンスデーアドベンチストという名称は、安息日を含めた十戒（律法）の大切さとイエス・キリストの再臨という希望に満ちた福音を表しています。

「お前たちが香をたき、主に罪を犯し、主の声に聞き従わず、律法と掟と勧めに従って歩まなかったために、今日のようにこの災いが臨んだのだ」エレミヤ44:23

主の声に聞き従わず、律法を無視したとき、イスラエルの民に災いが臨みました。律法が重要な意味を持っていることは疑いようがありません。しかし、大切だとわかっている律法を守ることができない問題に直面します。では、わたしたちにも災いが臨むのでしょうか。実際にはそのようなことはありません。なぜなら、わたしたちはイエス・キリストによる贖いの業を通して、神様の恵みにより無償で義とされるからです。

「ただキリスト・イエスによる贖いの業を通して、神の恵みにより無償で義とされるのです」ローマ3:24

律法がなければ、何が罪であるかがわかりません。罪が何であるかがわからないと、罪の自覚もありません。罪の自覚がなければイエス・キリストの十字架の贖いもわかりません。だから律法と福音は密接に結びついているのです。

「ここに、神の掟を守り、イエスに対する信仰を守り続ける聖なる者たちの忍耐が必要である」黙示得14:12

わたしたちは神様の掟を守り、イエスに対する信仰を守り続ける忍耐が求められています。それは簡単なことではないということです。神様はその力を与えて下さるので、必死にすがり、信じていきましょう。